

復	言	さ	と	か	さ	の	な	少	相
活	葉	れ	う	い	れ	あ	コ	し	手
し	た	て	よ	「	て	り	ミ	足	の
は	ち	き	う	」	い	方	ユ	を	私
じ	が	た	な	お	る	が	ニ	踏	的
め	現	ム	従	か	。	、	ケ	み	な
て	代	ラ	来	げ	「	再	ー	込	領
い	社	社	は	さ	お	び	シ	む	域
る	会	会	敬	ま	せ	注	ヨ	よ	ま
。	で	の	遠	」	っ	目	ン	う	で

戦後日本の住宅政策は、複数世代での同居という日本古来の家族形態を破壊するだけでなく、地域のコミュニティをも絶滅の危機に追いやった。これは、核家族化や個人居住を促進することで「住居」という耐久消費財を売らんがための経済優先の政策の結果によるものである。殺伐とした家族関係に見切りをつけ、新しいコミュニティを目指す者も現れた。悲劇的かつ自虐的だったオウム真理教をはじめとする宗教的集団、あるいは、学年別の明確なヒエラルキーを持つ体育会系集合体、競争関係をつくりながら仲間として活動するAKB48など、今風の「ムラ社会」が多数つくり出されている。そこには、これまでダサイと毛嫌いされ敬遠されて来たムラ的な理念やキーワードがあふれている。「おせっかい」「おかげさま」「おおきに」……。

お互いに干渉し合うような不合理を含む関係性への憧れが強くなってきたように思う。一般化した「絆」のような作作的なキーワードではなく、もっと根源的な渴望として「ムラ社会」的なきがらみを持つ「縁」に期待が集まっている。